

近代漢語の品詞性に見る多様性の画一化：形容詞用法を中心に

著者	間淵 洋子
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	2
ページ	93-106
発行年	2017
URL	http://doi.org/10.15084/00001510

近代漢語の品詞性に見る多様性の画一化 —形容詞用法を中心に—

間淵 洋子 (明治大学国際日本学研究所・日本学術振興会)†

Changes in the Usage of Sino-Japanese Words in Modern Japanese: With a focus on the adjectival usage

MABUCHI Yoko (Meiji University / Society for the Promotion of Science)

要旨

本研究は、現代日本語書き言葉の模索～確立の時代にあたる近代に焦点を当て、日本社会の近代化に伴い飛躍的に語彙を増やした漢語について、語法（品詞性）の通時的変化の一側面を明らかにするものである。特に、「必要な」「偉大なる」「堂々たる」といった助動詞を伴い体言を修飾する形容詞用法を持つ二字漢語に着目し、近代語コーパスと現代語コーパスの用例分析に基づいて、使用実態と変化を確認した。その結果として、近代と現代とで語法の変化が見られる語が少なくないこと、変化の類型には、形容詞用法を失うもの（「熟練」「親善」「優勝」など）、減少するもの（「幼稚」「漠然」「優良」など）、新たに形容詞用法を獲得するもの（「絶対」「任意」「均等」など）、形容詞用法が増加するもの（「多用」「高度」「莫大」など）の4種類があること、変化の背景には、語義の拡張・変化や、用法の固定化が関わること、総じて、模索的で多様性を有していた状態から、安定・定着に伴い画一化していく方向性が見出だせることを示す。

1. はじめに

近年、様々な時代の日本語を対象とした大規模なデータベースが整備されつつある。特に、語彙を対象とした研究には欠かせない単語情報の付与されたコーパスによって、これまでは難しかった、日本語の語彙の全体像を実証的に捉えることが可能になり、これらを用いた通時的な語彙研究も行われるようになってきている（田中 2016 など）。

発表者はこれまで、これらの言語資源を活用することで、近代と現代との間に見られる漢語の差異の実態や変化について分析・検討を行ってきた（間淵 2016a, 間淵 2016b, 間淵 2017）。これらの研究は、これまで多く指摘されてきた近代漢語の特異性（武部 1981, 今野 2012 など）について、大規模データを活かした計量的手法により大局的な観点からその実態を見渡し、変化の方向性とその背景を明らかにすることを目的に行ってきたものである。

本研究では、近代と現代に見られる漢語使用の差異のうち、品詞性の変化に着目し、特に形容詞用法に焦点を当て、①その差異の実態と②通時的な変化の様相を明らかにすること、③変化の要因を究明することを目的とし、既に、池上(1953, 1954), 鈴木(1998), 永澤(2010), 鳴海(2015), 等で多く指摘・報告がなされてきた、漢語の品詞・用法の変化について、新たな指摘を加えたい。

† mabuchi@meiji.ac.jp

2. 研究方法

2.1 コーパス

本研究では、現代および近代における漢語の形容詞用法の実態をできる限り網羅的に捉えるために、現在公開されている近代語と現代語のコーパスを用いた調査を行う。対象とするコーパスの概要を表1に示す。

表1 調査対象コーパスの語彙量

時代	資料	出版年	語数(万)	
近代	明六雑誌	1874-5	18	
	国民之友	1887-8	101	
	太陽		1895	202
			1901	197
			1909	187
			1917	180
			1925	203
	女学雑誌	189-45	59	
	女学世界	1909	52	
	婦人倶楽部	1925	54	
	全体	1874-1925	1,253	
現代	BCCWJ(出版 SC)	2001,2005	1,234	

近代語のコーパスとしては、2016年10月に全体が公開された『日本語歴史コーパス 明治・大正時代編I雑誌（以下、「CHJ 明治大正雑誌」または「CHJ」と略記）』（収録語数約1,253万語、自立語数約754万語）を用いる。

これと対照する現代語のコーパスとしては、2011年公開の『現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下、「BCCWJ」と表記）』の出版サブコーパス（以下、「SC」と表記）のうち2001年、2005年の発行分の可変長サンプルを用いる（記号等を除く収録語数約1,234万語、助詞・助動詞を除く自立語数約751万語）。BCCWJには、出版SCのほかに、現代における言葉の流通実態を捉えるのに適した図書館SC、個別の研究目的に沿うデータを集めた特定目的SCがあるが、本研究では、比較する近代のコーパスが雑誌のみであるため、逐次性の観点から共通性の高い資料として、雑誌や新聞を含む出版SCを対象とする。出版SCより2001年分と2005年分の2カ年のみを用いたのは、近代語コーパスと語数を概ね同様にできるように調整するためである。

2.2 調査対象語の抽出

漢語の仮名表記実態把握を試みるにあたって、全ての漢語を漏れなく抽出し分析を行うことが望ましいのは明らかであるが、本研究では、敢えて2字漢語に限って分析対象として扱うこととした。また、本研究は2字漢語の形容詞用法を対象とするが、「鬱陶しい」「仰々しい」「四角い」「ゲスい(下衆い)」「ザコい(雑魚い)」といったいわゆる学校文法でいう「形容詞」ではなく、使用する形態論情報付きコーパスの情報付けで「名詞」「形状詞」となる語が「だ」「なり」「たり」等の助動詞を伴って名詞を修飾したり属性を表す補語になった

りするもの、いわゆる学校文法でいう「形容動詞」(ナ形容詞)に相当するものを扱う。

なお、漢語の形容詞用法には、以下のように連体修飾用法(限定用法)と叙述用法があるが(以下の実例の引用においては、分析対象とする2字漢語を【 】で囲み、必要に応じて着目すべき前後文脈に下線を施す)、使用する形態論情報付きコーパスは、現状として構文情報が得られないため、形態から形容詞叙述用法といわゆる名詞述語文(「私は学生だ」の類)とを弁別することが困難である。よって、今回の調査においては、連体修飾用法の使用実態に基づき、形容詞用法の有無や使用割合の差異を比較することとする。また、これらの漢語は多く「に」を伴う動詞修飾用法をも持つが、こちらは「副詞用法」として扱うこととし、今回の分析対象とはしない。

漢語形容詞の用法

〈連体修飾用法(限定用法)〉

(1) 實際上共通の事情に基づける雇傭条件に就て雇主の團體との交渉上【有利】な結果を得ることが六ヶ敷い。

【出典】CHJ サンプルID: 60M 太陽 1925_13003 塩沢昌貞「歐米の労働組合並に労働團體」『太陽』1925年

〈叙述用法〉

(2) 場裏に立つに當りては米國の如く大陸國であると云ふことが非常に【有利】である。

【出典】CHJ サンプルID: 60M 太陽 1925_13006 添田寿一「日本の労働問題」『太陽』1925年

〈副詞用法〉

(3) 従つて戦後の收局を充分【有利】に指導することが出来たに相違ない。

【出典】CHJ サンプルID: 60M 太陽 1917_03022 覆面將軍「米獨國交斷絶の側面觀」『太陽』1917年

検索条件

〈キー条件〉

語彙素 「[一-働][一-働々]」(漢字二字からなる語を指定するための正規表現)

語種 「漢」

〈後方共起条件〉

後方1語 語彙素 「だ」「なり」「たり」 + 活用形 「連体形」

後方2語 品詞 大分類「名詞」

上記条件による用例検索の結果、異なり語数で、CHJにおいて約4,500語、BCCWJにおいて約1,400語が抽出され、これらを統合し、近代・現代のいずれかで形容詞連体修飾用法を持つ可能性のある漢語として約4,800語が抽出された。これら約4,800語のうち、近代・現代両時代での形容詞用法の実態比較に不適切・不十分な条件の語として、

- ① 単独で形容詞連体修飾用法を持たない語(例:「規模/キボ」...形容詞用例は「大|規模」「小|規模」のみ、「条理/ジョウリ」...形容詞用例は「不|条理」のみ、等)、
- ② 近代・現代のいずれか一方の時代でしか用いられていない語、
- ③ 近代・現代それぞれの時代で全用例の出現粗頻度合計が10語を超えない語

については、分析対象外として排除し、最終的な分析対象は、異なりで1,081語となった。

3. 調査結果

3.1 形容詞用法の有無

表2 時代と形容詞限定用法の有無とに基づく漢語分類

カテゴリー	語数	語例 (形容詞用法の高頻度順)
近代 形容詞	329	感心, 彷彿, 沢山, 不可, 熟練, 混沌, 優越, 反対, 多数, 少数, 悠々, 強壯, 軽便, 不祥, 繁華, 文明, 無味, 判然, 潔白, 精鋭, 豊饒, 大抵, 乾燥, 親善, 得々, 偶然, 中堅, 乱雑, 懇意, 直接, 平然, 無私, 入用, 仰山, 秘密, 評判, 必然, 普遍, 格段, 細心, 利益, 無事, 繁盛, 超然, 渾然, 寂寥, 優勝, 分別, 年長, 虚偽, 幼少, 盲目, 隱密, 繁忙, 壯健, 大体, 集約, 忠誠, 卓越, 光明, 慈善, 適任, 難渋, 大量, 最小, 明細, 大概, 誤謬, 本当, 愚痴, 少額, 特長, 便益, 瞭然, 光荣, 深紅, 危急, 不具, 希代, 富貴, 紅色, 無双, 唯一, 沈黙, 無言, 下落, 密着, 呆然, 淡々, 皆無, 最多, 好物, 随一, 颯爽, 富豪, 悲哀, 多端, 博愛, 漫然, 無二, 無類, 現実, 苦勞, 發明, 賛成, 冒険, 特色, 絶好, 教官, 多々, 専制, 茫然, 至極, 画一, 点々, 奇形, 親近, 高率, 太平, 壯年, 不測, 不実, 肅々, 近傍, 通俗, 訳書, 脈々, 忠義, 沈静, 下種, 眈眈, 危篤, 歴々, 狼藉, 不貞, 緩徐, 不治, 白々, 経済, 一般, 安定, 突然, 少々, 徐々, 短期, 折角, 相違, 正義, 間接, 夢中, 無数, 円形, 快樂, 執着, 近親, 和平, 偏見, 屈辱, 空想, 独創, 急遽, 遠隔, 最上, 固形, 全盛, 無罪, 変態, 快速, 知名, 孝行, 無形, 野性, 最盛, 得策, 偽善, 功德, 低価, 愛敬, 有形, 白金, 快晴, 同量, 最愛, 大儀, 異状, 全能, 稔然, 要害, 気鋭, 未開, 道楽, 猛然, 好況, 揚々, 変則, 球形, 同格, 中位, 緑色, 弱小, 醜態, 信愛, 穩便 (形容詞頻度1を除く203語)
現代 形容詞	52	問題, 絶対, 相互, 積極, 疑問, 蛋白, 長期, 高速, 最低, 必死, 法的, 任意, 正式, 公式, 私的, 陽性, 有意, 成熟, 均等, 好評, 阿呆, 人的, 中性, 中立, 内的, 陰性, 外的, 狂気, 万全, 余剰, 微量, 苦難, 異端, 認容, 心的, 健在, 協和, 親和, 随意, 自明, 強靱, 過渡, 神妙, 直截, 内密, 史的, 磐石, 政略, 好色, 一意, 不敬, 傲然
通時的 形容詞	700	重要, 必要, 可能, 大切, 適切, 十分, 巨大, 特別, 簡単, 奇麗, 多様, 有名, 大変, 複雑, 大事, 重大, 貴重, 立派, 完全, 主要, 自由, 奇妙, 特殊, 危険, 自然, 強力, 困難, 単純, 有効, 優秀, 明確, 深刻, 正確, 微妙, 偉大, 便利, 膨大, 豊富, 強烈, 広大, 適當, 安全, 新鮮, 健康, 余計, 確實, 正当, 意外, 正常, 詳細 (上位50語)

まず、抽出した1,081語を、近代・現代両コーパスでの形容詞用法の有無によって整理・類別した。近代にのみ形容詞用法があるものを「近代形容詞」、現代にのみ形容詞用法があるものを「現代形容詞」、両時代共に形容詞用法を有する語を「通時的形容詞」として分類すると、表2の通りである。

全体の約 65% (700 語) は、両時代で共に形容詞用法が見られる語である。語例を見ても、一般的なナ形容詞がこれに分類されていることが分かる。近代・現代のいずれか一方の時代でのみ形容詞用法が見られる語については、「現代形容詞」52 語 (約 5%) に対して「近代形容詞」329 語 (約 30%) と、近代で見られた形容詞用法の消失した語が多く存在することが分かる。また、これまでの先行研究の多くは、近代に特異に見られる形容詞用法が現代で消失していることの指摘が多かったが、実際には、永澤(2010)が報告するのと同様、逆方向の変化(「用法の出現」)も見られることが分かる。

3.2 形容詞用法比率

表 3 形容詞率に基づく漢語の層別 (語例は上位 10 語)

カテゴリー	近代		現代	
	語数	語例	語数	語例
A 80% ～	1	純然(218/246/88.6%)	13	広大(145/175/82.9%), 莫大(85/93/91.4%), 純然(14/16/87.5%), 惨憺(16/18/88.9%), 些細(70/73/95.9%), 悲痛(23/27/85.2%), 膨大(158/189/83.6%), 錚々(11/13/84.6%), 瀟洒(9/10/90%), 沈痛(10/10/100%)
B 40～ 80%	73	立派(718/1182/60.7%), 重要(450/969/46.4%), 有名(644/958/67.2%), 重大(471/805/58.5%), 有力(394/659/59.8%), 健全(267/528/50.6%), 偉大(293/521/56.2%), 高尚(215/463/46.4%), 有益(166/359/46.2%), 広大(163/351/46.4%)	194	立派(261/410/63.7%), 重要(1542/3437/44.9%), 重大(276/407/67.8%), 健全(108/240/45%), 偉大(165/217/76%), 複雑(324/710/45.6%), 強固(46/79/58.2%), 多大(61/93/65.6%), 有益(50/100/50%), 神聖(54/131/41.2%)
C 20～ 40%	267	完全(476/1540/30.9%), 適当(456/1389/32.8%), 大切(280/739/37.9%), 簡単(188/656/28.7%), 愉快(135/609/22.2%), 公平(141/590/23.9%), 結構(130/569/22.8%), 極端(176/531/33.1%), 堂々(184/509/36.1%), 確実(157/487/32.2%)	181	困難(209/1037/20.2%), 適当(139/439/31.7%), 特別(357/1751/20.4%), 不幸(61/278/21.9%), 有名(327/869/37.6%), 便利(160/640/25%), 大変(325/1356/24%), 大切(490/1780/27.5%), 明白(34/151/22.5%), 大事(296/975/30.4%)
D 5～ 20%	364	必要(745/5820/12.8%), 非常(726/3685/19.7%), 十分(310/3263/9.5%), 種々(230/2197/10.5%), 困難(263/1852/14.2%), 同様(103/1592/6.5%), 相当(73/1459/5%), 満足(75/1441/5.2%), 危険(188/1241/15.1%), 特別(103/1138/9.1%)	200	必要(1380/9875/14%), 自由(257/2626/9.8%), 自然(218/2969/7.3%), 十分(451/2546/17.7%), 容易(52/617/8.4%), 平和(45/695/6.5%), 完全(260/1454/17.9%), 相当(87/1231/7.1%), 危険(221/1450/15.2%), 幸福(47/290/16.2%)
E ～ 5%	324	自由(138/4211/3.3%), 経済(2/4062/0%), 事実(1/3902/0%), 自然(98/3811/2.6%), 一般(2/3305/0.1%), 利益(9/3104/0.3%), 多数(23/2611/0.9%), 反対(23/2502/0.9%), 普通(20/2313/0.9%), 容易(97/2264/4.3%)	164	問題(2/8519/0%), 非常(31/1664/1.9%), 普通(2/1717/0.1%), 種々(10/230/4.3%), 独立(3/857/0.4%), 高等(5/353/1.4%), 同一(3/710/0.4%), 同様(73/2037/3.6%), 随分(3/508/0.6%), 満足(19/898/2.1%)

次に、各時代で出現総頻度に対する形容詞用法 (上記検索条件により抽出された連体修

飾用法のみ)の頻度の比率である「形容詞率」を求め、これによる層別を試みた。各時代でそれぞれの層に含まれる語数と、語例として出現総頻度数の高いものから上位10語を「形容詞用法頻度 / 出現総頻度 / 形容詞率」と共に示すと表3の通りである。

形容詞率によるカテゴリ

A : 80%以上 B : 40%以上 80%未満 C : 20%以上 40%未満 D : 5%以上 20%未満
E : 5%未満 F : 使用なし

表4 形容詞率に基づく漢語分布 (近代×現代)

近\現	A	B	C	D	E	F	総計
A	1						1
B	7	48	8	<u>6</u>	<u>4</u>		73
C	<u>5</u>	103	80	44	<u>11</u>	<u>24</u>	267
D		<u>36</u>	83	98	48	<u>99</u>	364
E		<u>5</u>	<u>5</u>	38	70	206	324
F		<u>2</u>	<u>5</u>	<u>14</u>	31		52
総計	13	194	181	200	164	329	1081

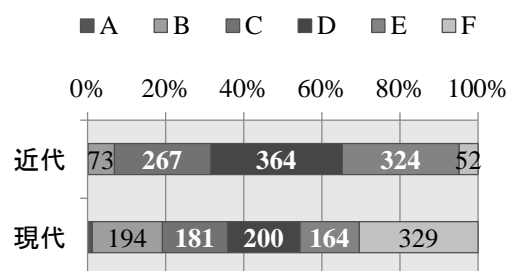


表4に、近代・現代の形容詞率に基づくカテゴリをクロス集計したものを示す。両者のカテゴリ間の相関を見ることができる。また図1は、時代別のカテゴリ分布を割合のグラフとして示したものである。表3, 4, 図1より、比較的高い比率で形容詞として用いられる語(カテゴリA, B)については、1,081語中、近代74語(約7%)に対して現代207語(約19%)と、現代でより多い。一方、形容詞用法の比率が中程度(カテゴリC)から低い語(カテゴリD, E)には、近代の方が多く分布していることが分かる。

このような分布を、先に3.1節で見た用法の有無と照らし合わせて考えると、近代から現代へ移行する中で、一方では形容詞用法をまったく失う語群があり、他方、形容詞用法が定着する語においては、形容詞としての性質を増大させるといった二極化の様相を呈しているようにも見える。

そこで、次に、形容詞用法の有無や形容詞率の、時代による相違は何に起因するかを検討するために、近代から現代にかけての「変化」という点に着目して、用例の分析と合わせてその背景を検討してみたい。

3.3 用法の変化類型

先に3.1節において整理した、形容詞用法の有無の近代-現代間での異なりは、用法の〈消失〉〈出現〉という変化の様相として捉えることができる。同様に、3.2節において示した形容詞率のカテゴリにおいて、近代-現代間でカテゴリ間の変動が生じているものも、やはり品詞性の変化という観点から捉えることができる。そこで、本節では、カテゴリ間の変動が2段階以上のもの(例:近代での形容詞率カテゴリがCである語が、現代ではAやEであるような場合。表4において、太字下線で示した区分の語)を明確な変化とみなすこととし、2段階以上カテゴリが上昇したものを〈増加〉、下降したものを〈減少〉、2段階以

上の変動が見られないもの〈不変〉として、形容詞用法の変化による漢語の類別を行う。
表5に、変化類型名、所属語数、所属語例を示す。

表5 形容詞用法の変化類型に基づく漢語の類別

類型	語数	語例
〈不変〉	628	必要, 非常, 立派, 有名, 完全, 重大, 适当, 重要, 有力, 十分, 偉大, 大切, 健全, 困難, 種々, 純然, 高尚, 簡単, 複雑, 危険 (上位20語)
〈減少〉	21	幼稚, 漠然, 肝要, 優良, 穩健, 簡易, 優等, 澆刺, 四角, 重宝, 狭小, 単一, 満々, 津々, 扁平, 有毒, 歴然, 零細, 純白, 低調, 軽量
〈増加〉	51	莫大, 多大, 厄介, 無謀, 異様, 非凡, 瀟洒, 温厚, 無情, 華美, 無残, 悲痛, 平易, 斬新, 屈強, 地味, 險悪, 希有, 潤沢, 風流, 奇特, 多様, 無欠, 長大, 尊大, 流麗, 豪華, 病的, 詩的, 剛直, 無稽, 適度, 安易, 杜撰, 豪奢, 闊達, 吝嗇, 絢爛, 不孝, 重厚, 過重, 劣悪, 不遜, 高度, 有能, 良質, 対等, 邪悪, 壯絶, 不毛, 有徳
〈消失〉	329	(省略; 表2「近代形容詞」参照)
〈出現〉	52	(省略; 表2「現代形容詞」参照)

次節では、変化類型ごとに、用法変化の実態とその背景について検討する。

4 分析

4.1 形容詞用法の消失・衰退の背景

4.1.1 用法の固定化

まず、現代語と近代語とで意味用法が大きく異なる語について見てみたい。「優等」を例として示す。

(4) 此社會は隨分性質強壯な社會である、隨分【優等】な国民である

【出典】CHJ サンプルID: 60M 太陽 1895_06009 加藤弘之「遺傳應化の理によりて學問奨励の方法を論ず」『太陽』1895年

(5) 師範學校卒業の女子と言へば【優等】の位地を占むるものなり

【出典】CHJ サンプルID: 60M 女雑 1894_29023 松籟生「地方に於ける有教育女子の情態」『女学雑誌』1894年

(6) 學校の優等生は必ずしも社會の【優等】生になれないことが多い。

【出典】BCCWJ サンプルID: PB54_00148 内海正彦『自然から学んだお爺ちゃんの知恵袋』(新風舎)2005年

「優等」は、(4)(5)のように、近代では“等級が優れていること、レベルが高いこと”を表す形容詞、名詞として用いられているが、BCCWJでは93例中82例(約88%)が(6)と同様の「優等生」の例であり、現代ではほぼ「優等生」という複合名詞の用法に固定化されている(CHJでの「優等生」の用例は159件中14例、約22%)。この用法の固定化の背景には、近代で用いられていた「優等」という語自体の衰退がある。

近代における「優等」の用法の年次変化を示した図2を見ると、「優等」は、1895年・1901

年では40例強の用例数が見られるが、その後頻度が減少し、それに伴い形容詞用法も減少していく。恐らく、レベルの高さを表現する語彙が「優等」以外の他の表現に取って変わったため、「優等」という語そのものが衰退していったものと思われる。その中で、「優等生」だけが固定化された表現として生き残った結果、近代との間に用法比率の差異が見られるようになったものと考えられる。

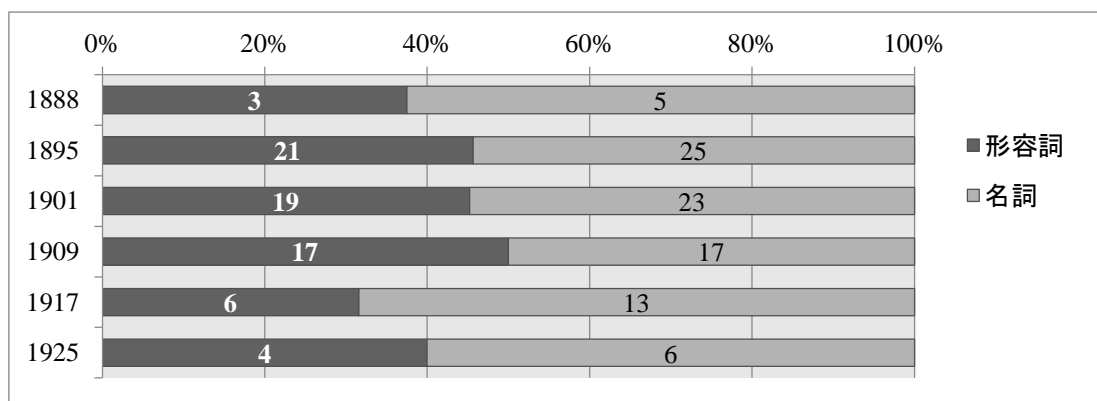


図2 近代における「優等」の用法の年次変化

「優等」と同様に、語自体の衰退に伴い、特定の複合語表現のみに用法が固定化されることで、形容詞用法が衰退したと見られる語には、「繁華(→繁華街)」、「最盛(→最盛期)」、「有識(→有識者, 有職故実)」、「幼稚(→幼稚園)」、「優越(→優越感)」、「不詳(→不祥事)」などがある。また、近代では単独で助動詞を伴う形容詞用法を持っていたものの、現代では専ら「的」を伴い形容詞・副詞化する方向で固定化されたものも多く、「画一(的)」、「独創(的)」、「必然(的)」、「根本(的)」などがある。

4. 1. 2 意味変化と他品詞への移行

(7) 不景氣に苦しみ、貴族的の習風日々に増加せる日本社會に、一人の【文明】なる民友記者あり、

【出典】CHJ サンプルID: 60M 国民 1888_24025 著者不明「經濟記者と新日本(三)」『国民之友』1888年

(8) 是に於て折角【文明】なる官吏の作りし法律も時としては姦人を助けて

【出典】CHJ サンプルID: 60M 太陽 1909_16007 山路愛山「元老の現在及び未來」『太陽』1909年

「文明」は、『日本国語大辞典第2版』に「文教が盛んで人知が明らかになり、精神的・物質的に生活が快適である状態。」とあるが、例(7)(8)においては、社会や生活を指すのではなく、人物への評価に「文明」を用いており、“人知の明るいさま”を表す形容詞用法として機能している。このような用法は、近代語コーパスの「文明」2172用例中、7例しか現れない。「文明」の派生的な用法と見ることができるが、『国民之友』に3記事、『太陽』1895年に1記事、同1909年に1記事、『女学世界』1909年に1記事に見られ、その後現れない。派生的な用法が定着しなかったために、現代では消失している形容詞の例である。

(9) ...いい度胸だな。【感心】な度胸だ。

【出典】CHJ サンプルID：60M 太陽 1925_13059 国枝史郎「長篇小説 鮎つかひ（第五回）」『太陽』1925年

(10) 併し君だけは【感心】に大概一定の線路の上を兎に角進んで居るやうだ。

【出典】CHJ サンプルID：60M 太陽 1901_02022 幸田露伴「縁の糸」『太陽』1901年

(11) 此名木を此得難い樽に収めたのであると聞いて、成程と【感心】した。

【出典】CHJ サンプルID：60M 太陽 1909_12029 永山天淵「海外通信 シヤトル博覽會雜記」『太陽』1909年

同様に「感心」の例を見てみよう。例(9)は、後接名詞「度胸」を「な」を伴って修飾する形容詞連体修飾用法、(10)は「に」を伴って後接する動詞句を修飾する副詞用法である。いずれも、「心が動かされるほど立派な様子」を表す、現代語ではほぼ見られない用法である。「感心」は、(11)の動詞「スル」を伴うサ変動詞用法と、名詞用法を加えた4用法が近代語コーパスでは見られる。用法の比率を年次別に示したものが図3である。

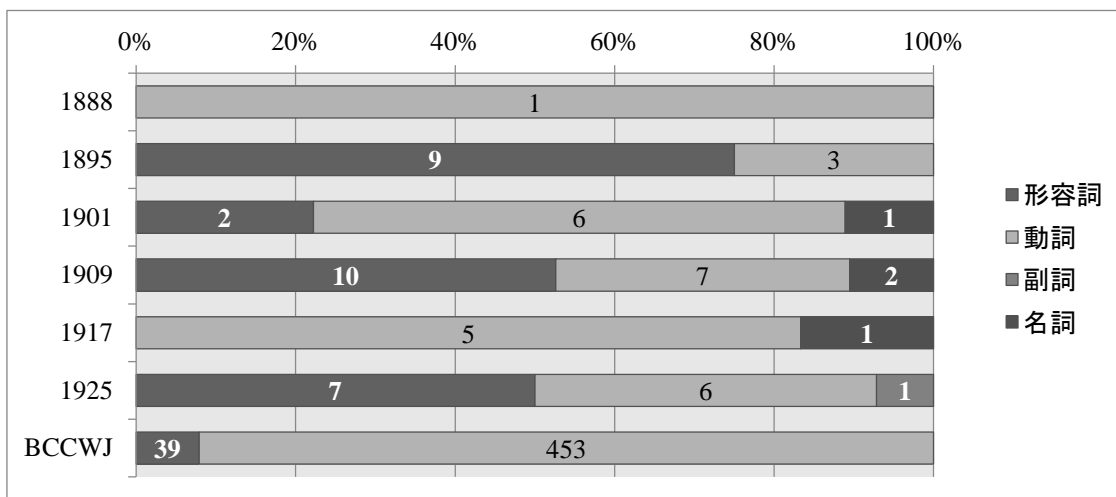


図3 「感心」の用法の年次変化

図3より、近代では、様々な用法が様々な分布状況で用いられており多様性が見られるが、現代においては、ほぼ動詞用法に画一化されている状況が分かる。

名詞修飾から動詞修飾へと役割を変えて副詞用法を派生するなど、近代では様々な語法が試みられた。派生後の品詞が勢力を伸ばし、そちらに用法が集約されることによって、形容詞用法が衰退することに繋がったのが「感心」の用法変化の背景だったものと思われる。「感心」と同様、動詞化して安定するものに「孤立」「並行」「閉口」「下落」「密着」など、副詞化して安定するものに「一概」「徐々」「大体」「大抵」「案外」「格段」「急遽」「多分」「全然」などがある。

一方、「優勝」は、“優れ勝っている様子”(例12)、“優るものが勝つ”意(13)で用いられていたものが、動詞的意味の中で次第に変化し、現代では“競技等で第1位になる”意で専ら用いられており、派生義が定着することで形容詞から動詞へと品詞性が変化したものである。

(12) 兩國は最も【優勝】なる地位を政治上、經濟上、其他各種の關係に於て占める事ができるが、

【出典】CHJ サンプルID: 60M 太陽 1917_10022 早川千吉郎「日英の經濟的關係改善論」『太陽』1917年

(13) 自然淘汰だの【優勝】劣敗だのとやかましく理科の時に教はつてゐる生徒だもの、

【出典】CHJ サンプルID: 60M 女世 1909_16022 むらさき「女子教育に疑問を抱く地方の女學生」『女学世界』1909年

「優勝」と同様に、元義が損なわれ、派生した意味で定着したものに「明細」「愚痴」などがある。

4. 1. 3 口語体移行に伴う接続形式の変化（ト型副詞用法への移行）

(14) 認識し得られざりし彼等が、漸く其饑渴の苦境を過ぎて、稍【平然】たる時必然起るべき智識的信仰の疑問に想到せば、

【出典】CHJ サンプルID: 60M 太陽 1901_09010 荻野仲三郎「宗教時評」『太陽』1901年

(15) けれども春子は、【平然】とした微笑を消さなかつた。

【出典】CHJ サンプルID: 60M 婦俱 1925_12048 三上於菟吉「寫眞小説 魂を賣る（六）」『婦人倶楽部』1925年

例(14)(15)の「平然」は、いずれも後続する名詞を修飾する形容詞用法だが、(14)の文語文に対して、(15)は口語小説地の文として、助動詞「たり」による接続ではなく、連語「として」による接続である。「平然」の意味に相違はなく、文体差による語法の異なりであるが、本研究においては、助動詞を介して名詞を修飾しない(15)は分析対象外となっている。文語から口語への移行期である近代語コーパスでは、年次を追うごとに「として」による接続が増え、現代語コーパスでは完全に「として」に取って代わられる。

同様に、タリ型形容詞からト型副詞へと移行したことにより、形容詞用法が消失・減少したものに、「杲然」「判然」「愕然」「歴然」「漠然」等「然」が後項にくる漢語、「悠々」「淡々」「点々」「続々」等疊語による漢語がある。

4. 1. 4 ノ型連体修飾の定着

(16) 【熟練】なる劍士は危険の位置に立ち乍ら泰然として騒がず、

【出典】CHJ サンプルID: 60M 太陽 1909_13050 内田嘉吉「名士の西班牙觀 懷手の國民」『太陽』1909年

(17) その後各交戦國とも、これ等【熟練】の職工を悉く戦線に出しては、

【出典】CHJ サンプルID: 60M 太陽 1917_03012 東郷安「戦時歐洲雜觀」『太陽』1917年

(18) あはれ〇〇新聞連載中の【評判】な蘭香女史が長篇小説、引續いての本日休載、

【出典】CHJ サンプルID: 60M 女世 1909_10013 萩香「小説 まつかぜ」『女学世界』1909年

(19) 且又當時【評判】の小説家を網羅したれば兎も角も好評を博するならん、

【出典】CHJ サンプルID: 60M 国民 1888_33013 高橋五郎「みやこのはな 第一號」

例(16)(17)は、それぞれ「熟練」が「なる」または「の」を伴って後接する名詞「劔士」「職工」を修飾する形容詞連体修飾用法である。(18)(19)も、同様にそれぞれ「な」「の」を伴い後接名詞を修飾しており、これらの文法的資格になんら変わりはない。このように、連体修飾用法において、近代でナ・ナル・タル型（助動詞連体形）とノ型（格助詞）の双方で接続していたものが、現代ではノ型接続で固定化されている語が、数多く存在しており（「沢山」「混沌」「反対」「多数」「不詳」など、約 250 語）、近代におけるナ形容詞の衰退の最も大きな背景となっている。

さらに詳細に見ると、文語文におけるナル・タル型連体修飾接続が口語化に伴いノ型接続に移行していくものが多いこと、ナ型とノ型が併用されている場合は、その分布に偏りがあり、概ねノ型が優勢で、加えてナ型は文体的・位相的特殊性（会話文や女性雑誌に用例が多く、ややくだけた文体イメージ）を持つ可能性があり、より無標のノに集約され淘汰された可能性のあることが指摘できる。

4. 2 形容詞用法の出現・増加の背景

4. 2. 1 意味変化：形容詞性（状態・付帯性質的意味）の獲得

(20) されば本年横山大観君が「雲來去」を描いて【好評】を博したが、

【出典】CHJ サンプル ID : 60M 太陽 1917_13043 中村不折「厭ふべき傾向」『太陽』1917 年

(21) 萩中學の教員香川政一君の双親の元氣な別れなどは、當時、頗る【好評】だった。

【出典】CHJ サンプル ID : 60M 太陽 1925_05054 横山健堂「維新志士を輩出せしめたる萩の雰
圍氣」『太陽』1925 年

(22) ここでは市販の【好評】な製品の分析値を基にして、調味液の処方をつくり出す方法を紹介する。

【出典】BCCWJ サンプル ID : PB15_00325 太田静行『ヒット食品の開発手法』2001 年

ここでは、形容詞用法が現代において新たに生じた語、形容詞用法が興隆している語について見ていく。現代で例(20)のようなナ型連体修飾用法を持つ「好評」を例に、近代での用いられ方との差異と、変化の背景を検討する。

現代での形容詞限定用法に対して、近代語コーパスにおいては、名詞用法以外に、(21)のような「○○が好評だ」の形の叙述用法（「好評」の全 81 例中 9 例）が見られるのみで、用法の広がりは見られない。残りの 9 割は、(20)同様、「好評を博す」「好評を得る」「好評が有る」など極めて固定的な表現による用例で、文字通り“好い評判”というモノの意味でしか用いられていない。一方現代語の例では、例(22)のように“評判の好い”、“人気の”という、人やモノの様態を表す語として用いられており、語法面での差異としても表れている。近代における「好評」は定着と発達の過渡期にあると言えよう。

現代で新たに形容詞用法が出現した語については、モノを表す名詞から、そのモノの付帯する〈状態〉へ、〈動作・状態〉を表す動詞から動作後の〈状態〉や〈状態の継続した様相〉へと意味焦点がシフトすることにより派生的に状態性を表す語義が生じ、それに伴い形容詞用法が生まれたものと位置付けられる。同様に名詞から形容詞的意味を派生させていると思われるものに「阿呆」「好評」「余剰」「政略」「随意」「公式」「盤石」など、動詞

から形容詞的意味を派生されていると思われるものに「健在」「成熟」「認容」「中立」「協和」「親和」などがある。

4. 2. 2 形容詞性接辞「的」「性」の造語性

極めて造語性の高い接辞「的」や「性」を含む 2 字漢語には、現代で形容詞用法を獲得する語が多く含まれる。

(23) 其【法的】秩序を保障する一大責任ある法官は、

【出典】CHJ サンプル ID : 60M 太陽 1901_10009 岡田三面子「〔法律時評〕」『太陽』1901 年

「法的」は、「法的な判断」「法的に有効」など現代では様々な用法が見られるが、近代においては、例(23)の「法的秩序」や「法的手段」「法的認定」といった専門用語的な表現でのみ用いられている。これらは、元来、語と語を連結する「的」の役割に則った用法であるが、現代語に見られるナ形容詞用法は、「的」と一語化し名詞として独立した 2 字漢語が、その状態・様態性を帯びた性質からナ形容詞として定着した結果、獲得されたものと考えられる。

4. 2. 3 「に」を伴う副詞用法の増加と連体修飾時におけるナ・ノ選択のゆらぎ

形容詞用法を獲得する漢語には、近代において「に」を伴う連用修飾用法を持つ語が多い。ナ型連体修飾用法が 2 例以上見られる 29 語の漢語中、22 語がニ型副詞用法を持つ。

(24) 財政外交の困難より苦しくなつて自分等が【任意】に内閣を少数黨にでも明け渡すのである。

【出典】CHJ サンプル ID : 60M 太陽 1909_05016 加藤恒忠「新政黨觀 二大黨對立の愚論」

例(24)に見るように、「に」を伴う連用修飾用法は、ナ形容詞の連用修飾用法と形態的に一致しているため、連体修飾用法におけるナ・ノ選択においてナを選択する契機があり、形容詞用法出現の可能性がある。これらの語は、近代においてはいずれもノ型連体修飾であるが、現代においては、ナ型に移行しているか、ノ型とナ型が併用されている。

連体修飾形式が近代におけるノ型から現代でナ型に移行したことが原因で、形容詞用法を獲得した語には、「一意」「任意」「随意」「神妙」「長期」「積極」「不敬」「相互」「必死」「正式」「相互」「問題」「疑問」「直接」「政略」「相互」などがある。

これらは、先に 4.1 節内「ノ型連体修飾の定着」で示したのと、ちょうど逆方向の変化が起こったものである。近代でナ型・ノ型の混用状態にあったものが、よりノーマルな（無標の）接続形式としてノ型に集約していったのに対して、これらの語では、語義的・文法的性質（状態・様態性、格助詞付与の不適合さ等）において近接する形容詞の標準的な接続形式として、ナ型を選択し定着したものと位置づけることができよう。

5. まとめ

以上、近代語・現代語の両コーパスを用いて、1,081 語の 2 字漢語を対象に、形容詞用法の差異の実態と、変化の様相、背景について検討してきた。形容詞用法の有無や、形容詞用法の使用比率といった指標を用いて漢語を類別し比較・対照することによって、近代と

現代における2字漢語の語法に関して、以下の3点を指摘した。

- ① 近代と現代において形容詞用法の使用実態に変化の見られる語が少なかった。変化の類型としては、形容詞用法を失ったもの（「熟練」「親善」「優勝」など329語）が圧倒的に多く、次いで形容詞用法が新たに生じたもの（「絶対」「任意」「均等」など52語）、形容詞用法が増加したもの（「多用」「高度」「莫大」など51語）、形容詞用法が減少したもの（「幼稚」「漠然」「優良」など21語）の4類型が見られた。
- ② ①に示した変化の背景には、語義の拡張・変化や、用法の固定化が関わっているものもあったが、近代口語文の確立期において、タリ型（タル＋名詞）からト型（トシタ＋名詞、トシテ＋動詞）への語法的变化や、連体修飾用法におけるノ型とナ型の混用とその変化、助詞「に」を伴う新たな連用修飾方法の獲得などを背景に、ナ型連体修飾用法の比率が大きく変動している傾向が見られた。
- ③ これらの変化の方向性は、近代漢語の語法が、多分に模索的で多様性を有していた状態から、安定・定着に伴い徐々に画一化していく方向性として捉えることができた。

6. おわりに

本発表では、近代と現代の間に見られる2字漢語の品詞性の差異について、形容詞用法に焦点を当てて検討した。近代と現代とに見られる漢語の品詞性の差異については、既に間淵(2016a)において明らかにした動詞用法、現在進めている副詞用法を、統合的に位置付け把握する必要がある。特に、本研究で指摘した、用法の変化については、他の品詞性との関わりが大きく、現代においては近代で多様な品詞性で用いられていた語が、次第にある用法に特化して勢力を増し、定着する見通しを持っている。これらについては、機を改めて報告したい。

謝 辞

本稿は、日本学術振興会特別研究員奨励費 16J08872「コーパスを利用した近現代漢語の表記・語法の多様性に関する計量的・通時的研究」（代表：間淵洋子）による成果の一部である。

文 献

- 池上禎造(1953)「近代日本語と漢語語彙」金田一博士古稀記念論文集刊行会編『民族論叢：金田一博士古稀記念言語』三省堂
- 池上禎造(1954)「漢語の品詞性」京都大学国文学会『国語国文』23-11 三省堂, pp.92-101
- 池上禎造(1984)『漢語研究の構想』岩波書店
- 小木曾智信・中村壮範(2011)「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報データベースの設計と実装 改訂版」（特定領域研究「日本語コーパス」平成22研究成果報告書（JC-U-10-01））
- 国立国語研究所(2005b)『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集—』博文館新社
- 近藤明日子(2014)『『国民之友コーパス』解説書 第1.1版』
(http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/doc/kokumin_manual_v1_1.pdf)
- 近藤明日子・小木曾智信ほか(2012)「『明六雑誌コーパス』の開発—近代語コーパスのモデルとして—」『第2回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』国立国語研究所,

pp.329-334

- 今野真二(2012)『百年前の日本語—書きことばが揺れた時代 (岩波新書)』岩波書店
- 鈴木丹士郎(1998)「明治期漢語の品詞性と語形についての一考察」東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会編『東京大学国語研究室創立百周年記念国語研究論集』汲古書院, pp.728-750
- 鈴木英夫(2005)「明治時代以後の日本語 語彙・文体」近藤康弘・月本雅幸・杉浦克己編『新訂 日本語の歴史』放送大学教育振興会, pp.180-193
- 須永哲矢・近藤明日子(2012)「近代語コーパスのための形態論情報付与規程の整備」田中牧郎ほか『近代語コーパス設計のための文献言語研究 成果報告書 (国立国語研究所共同研究報告 12-03)』国立国語研究所, pp.93-117
- 田島優(1998)『近代漢字表記語の研究』東京：和泉書院.
- 田中牧郎(2005)「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」国立国語研究所(2005b), pp.1-48
- 田中牧郎(2006)「『近代女性雑誌コーパス』の概要」『日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究(B)「20世紀初期総合雑誌コーパス」の構築による確立期現代語の高精度な記述』, pp.55-62
- 田中牧郎 (2016)「第8章 語種」斎藤倫明編『日本語語彙論I (講座 言語研究の革新と継承1)』241-274. 東京：ひつじ書房.
- 田野村忠温(2002)「形容動詞連体形における「な／の」選択の一要因—「有名な」と「無名の」」『計量国語学』23(4), pp.207-213
- 永澤済(2010)「変化パターンからみる近現代漢語の品詞用法」東京大学文学部言語学研究室『東京大学言語学論集』30, pp.115-168
- 鳴海伸一 (2015)『日本語における漢語の変容の研究: 副詞化を中心として (ひつじ研究叢書〈言語編〉125)』東京：ひつじ書房.
- 野村雅昭(1998)「現代漢語の品詞性」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』汲古書院, pp.128-144
- 前川喜久雄(2008)「KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の開発 (<特集> 資料研究の現在)」『日本語の研究』4-1, pp.82-95
- 間淵洋子(2016a)「近現代漢語におけるサ変動詞用法の変化—形態論情報付きコーパスを用いて—」『国際日本学研究論集』4, pp.17-35
- 間淵洋子(2016b)「近代二字漢語における同語異表記の実態と変化:形態論情報付きコーパスを用いて」『計量国語学』30(6), pp.257-274
- 間淵洋子(2017)「近代雑誌コーパスにおける漢語語彙の特徴—BCCWJ との比較から—」『国立国語研究所論集』13, pp.143-166

関連 URL

コーパス検索アプリケーション『中納言』

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>